

瀬波

n i w a



2019
第6号



nibato.net



NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第6号

niwa

瀬波

目次

平成 30 年度活動記録

青塚古墳史跡公園	2
木之下城伝承館・堀部邸	3
その他ニワ里ねっと自主事業	4
文化遺産関連受託事業	5
活動年表	6

研究論考

上野古墳群と7世紀の瀬波「前刀」 赤塚次郎	8
犬山焼の意匠にみる「仙境図」を考える 青木 修・佐久間真子・中野耕司	14

コラム

国史跡志段味古墳群での活動を前にして 服部哲也	18
----------------------------------	----

資料紹介

犬山市立池野小学校 所蔵資料について 大塚友恵	22
----------------------------------	----

会員の声・会員募集	26
-----------------	----



平成 30 年度

活動記録



青塚古墳史跡公園

管理・運営業務を犬山市より委託を受け実施。ニッ里ねっとと地元有志でつくる「青塚古墳を見守る会」が発足し、見守る会が主体となって古墳の清掃ボランティア活動を行いました。古墳まつりには、小牧工業高校のマーチングバンド部が出演、一気にイベントが華やぎました。秋の瀬波史楽座では、演劇、歌に加えてダンスも入り、古墳の前で魅力的なステージを繰り広げました。

1) 小学校の見学案内風景。2) 「青塚こども教室」にて公園内の樹木学習会。3) 瀬波史楽座「イヌカビデの劔」。4) 青塚古墳まつり。5) 「青塚みやげ話の会」6) 古墳の清掃活動。青塚古墳を見守る会とともに。

1

2

3

4

6

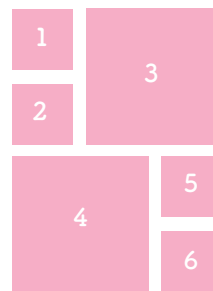
5



木之下城伝承館・堀部邸

2019年で第5期目となる木之下城伝承館・堀部邸。春の企画展では「刃物と砥石」の個人コレクションの展示、秋は「犬山の狒犬」をテーマに愛くるしい狒犬写真の数々を展示しました。隔月開催の月津塾では、鍔金、漆芸など様々なテーマを設けて開催し、多くの方にご参加いただきました。猪之子座では、コンサートに合わせてマルシェを開催するなど新たな試みも。

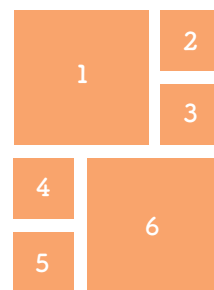
1) 堀部邸歴史文化会。会員による勉強会。2) 春の企画展「刃物と砥石」森修コレクション。3) 4) 猪之子座「安井正規コンサート」。同会場でのマルシェ風景。5) 月津塾6) 猪之子座「上方落語九雀亭」。



その他ニワ里ねっと 自主事業

「入鹿切れ」をテーマに調査や見学会を実施。地域の災害を見直す1年となりました。栗栖プロジェクトでは、栗栖地区の遺跡試掘調査を実施、地域の方に向けて説明会などを行いました。ニワ里バスツアーは、志摩市や大野町、桑名市・いなべ市などに出向き、会員の皆さんと古墳めぐりを楽しみました。毎年恒例の石上げ祭にも参加、今年で3回目！

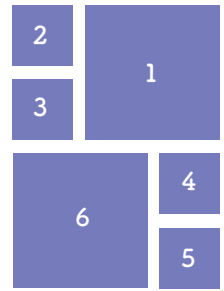
1) 栗栖、調査説明会。2) 3.11防災講演会「入鹿切れ」テーマに。3) ニワ里カレッジ「入鹿切れの痕跡を歩くin犬山安楽寺」4) ニワ里ウォーキング「下街道高山宿」5) 石上げ祭・遷波里連。6) 志摩バスツアー



文化遺産関連 受託事業

長野県阿智村、愛知県犬山市・大口町・尾張旭市・春日井市・清須市、岐阜県富加町・養老町、岐阜大学などから委託を受け、講演会、企画展示、散策会などを実施しました。坂祝町で行った講師と行くバスツアーは、県内外から多くの方にご参加いただき好評を博しました。文化遺産カードはついに200種類を超え、より多くの方に届くよう、新たにv. 2カードに切り替わりました。

1) 養老町・文化遺産ウォーキング 2) 尾張旭市・民具企画展 3) 富加町・学校講演会 4) 犬山市・東之宮古墳現地学習 5) 養老町・火打石ワークショップ 6) 富加、坂祝、美濃加茂・「猿啄城の攻防と城主ゆかりの地をめぐる」



18・19日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】「夕雲の春」学校講談

①講談・旭堂南海 ②富加小学校、坂祝小学校、蜂屋小学校

20日：【清須市】きよす歴史講談「朝日銅鐸発掘物語」

①講談・旭堂南海 ②清須市清洲市民センターホール ③約100名

21日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり4」

①講談・旭堂南海 ②木之下城伝承館・堀部邸 ③23名

24日：堀部邸歴史文化会「神社と祭神で描く古代像」

①在野一生（ニワ里） ②木之下城伝承館・堀部邸 ③12名

27日：ニワ里カレッジ「入鹿切れを科学する」

①森 勇一（地質学者） ②青塚古墳史跡公園 ③19名

28日：堀部邸特別公開

28日：【養老町】養老町産火打石ワークショップ

①水野裕之（名古屋教育委員会） ②養老町ふれあいセンター養老広場 ③31名

11月

3日：【犬山市】東之宮古墳現地学習

①赤塚次郎（ニワ里） ②犬山市東之宮古墳周辺 ③25名

3-25日：秋の企画展「犬山の狛犬群像」

②木之下城伝承館・堀部邸

3・4日：堀部邸2階特別公開日

②木之下城伝承館・堀部邸

10日：ニワ里カレッジ「揖斐・大野の古墳たび」

①赤塚次郎（ニワ里） ②青塚古墳史跡公園 ③38名

11日：【養老町】歴史講座「多芸七坊を考える」

①小野木 学（岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課）、廣瀬正嗣（養老町教育委員会） ②養老町中央公民館 ③60名

11・25日：秋の企画展展示解説

①中野耕司（写真家） ②木之下城伝承館・堀部邸

17日：月津塾「犬山の狛犬群像」

①赤塚次郎（ニワ里） ②木之下城伝承館・堀部邸 ③25名

17・18日：あいちの考古学ポスター発表「入鹿切れ150年、その被害を再考する」

23日：ニワ里サイクリング「美濃の国府をサイクリング」

①古川博昭（ニワ里） ②垂井町周辺 ③6名

24日：【春日井市】古墳消しゴムをつくろう

①大塚友恵（ニワ里） ②春日井市中央公民館

28日：堀部邸歴史文化会「熱田文書から尾張氏を探る」

①岡本利雄（ニワ里） ②木之下城伝承館・堀部邸

12月

2日：ニワ里カレッジ「入鹿切れの痕跡を歩く in 犬山安楽寺」

①西松賢一郎（大口町歴史民俗資料館）・大塚友恵（ニワ里） ②犬山市入鹿池周辺 ③30名

5日 - 3月3日：【犬山市】青塚古墳企画展「地域に眠る文化遺産 in 羽黒」

②青塚古墳史跡公園

8日：【大口町】シンポジウム「入鹿切れを考える～洪水堆積層の調査から～」

①森 勇一ほか ②大口町健康文化センター ③170名

9日：【犬山市】東之宮古墳写真展

①写真 中野耕司 ②犬山市役所

9日：【養老町】文化遺産ウォーキング

①廣瀬 正嗣（養老町教育委員会） ②養老町周辺 ③18名

15日：【阿智村】歴史講談「神坂峠発掘物語」

①講談・旭堂南海 ②阿智村中央公民館

16日：ニワ里バスツアー「揖斐・大野の古墳を訪ねる」

①赤塚次郎（ニワ里） ②大野町周辺 ③31名

22日：東之宮古墳冬至の王

23日：古墳よ jazz を聴け！

②青塚古墳史跡公園 ③26名

1月

9日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】歴史探訪セミナー「戦国時代を生き抜いた東美濃」

①講談・旭堂南海、講演・山内正明（富加町教育委員会） ②OKB Harmony Plaza 名駅 セミナールーム ③65名

12日：【犬山市】東之宮古墳学習会

①赤塚次郎（ニワ里） ②青塚古墳ほか ③13名

19日：【犬山市】まほら講座「入鹿切れ、その時羽黒村では…」

①大塚友恵（ニワ里） ②青塚古墳史跡公園 ③33名

23日：堀部邸歴史文化会「古神社 & 祭神から描く古代史シリーズ」

①在野一生（ニワ里） ②木之下城伝承館・堀部邸 ③18名

26日：【犬山市】まほら講座「羽黒今昔ばなし」

①津守道夫（羽黒コミュニティ） ②青塚古墳史跡公園 ③24名

2月

3日：古墳よ jazz を聴け！

②青塚古墳史跡公園 ③17名

9日：【養老町】象鼻山きのこ栽培ワークショップ

①津田 格（森林文化アカデミー） ②ふれあいセンター養老広場 ③9組18名

9日：【犬山市】まほら講座「尾北古窯と犬山の窯跡」

①中嶋 隆 ②青塚古墳史跡公園 ③38名

17日：【犬山市】まほら講座「散策・羽黒今昔ばなし」

①津守道夫（羽黒コミュニティ） ②犬山市羽黒周辺 ③20名

23日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】バスツアー「猿啄城の攻防と城主ゆかりの地をめぐる」

①講談・旭堂南海、講師・山内正明 ②富加町周辺 ③70名

24日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】夕雲の城外伝「猿啄の春」刊行記念イベント支援

3月

1日：青塚古墳を見守る会・古墳の清掃活動

③のべ57名

10日：ニワ里カレッジ防災講演会「過去から学ぶ、地域の防災 - 3.11を忘れない！ -」

①田中里志（京都教育大学）ほか ②犬山市立羽黒小学校 ③70名

16日：ニワ里バスツアー「桑名・いなべの古墳たび」

①赤塚次郎（ニワ里） ②桑名市・いなべ市周辺 ③24名

【犬山市】 青塚古墳史跡公園管理委託業務
(入館者数 16,483名)

木之下城伝承館・堀部邸管理業務 (入館者数 5,348名)

【大口町】企画展に関連した「入鹿切れ堆積物」調査業務

文化遺産カード発行【西尾市】【南知多町】【可児市】【美浜町】

【富加町・坂祝町・美濃加茂市】【弥富市】など

文化遺産カード・v. 式カードを配布開始

犬山市民活動助成金「遺跡の試掘による栗栖地区の災害史調査事業」(栗栖プロジェクト)

12月【岐阜大】岐阜大学郷土博物館整理支援業務

12月【養老町】豆馬亭展示支援業務

平成30年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」

①講師名 ②開催場所 ③参加者数

桃色：ニッ里自主事業

緑色：文化遺産関連受託事業

水色：その他の活動

4月

1日：青塚みやげ話の会

「ヤマトタケルの故郷 三輪王朝の宮都をたどる」山口県周防氏大日塚古墳

①岡本利雄・長尾哲汰（ニッ里）②堀部邸 ③16名

14日：ニッ里ウォーキング「下街道 高山宿を歩く」

①赤塚次郎（ニッ里）②下街道高山宿周辺 ③12名

18日：堀部邸歴史文化会

①岡本利雄（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸

21日：ニッ里サイクリング

①古川博昭（ニッ里）②清洲・甚目寺周辺 ③6名

22日：ニッ里バスツアー「古代志摩國の誕生を見つめる旅」

①赤塚次郎（ニッ里）②志摩市周辺 ③22名

28-5月20日：春の企画展「刃物と砥石」森 修コレクション第1回特別展

②木之下城伝承館・堀部邸

28日：堀部邸企画展関連講座「刃物と研ぎの技」

①森 修（春日井たたら研究会）②木之下城伝承館・堀部邸 ③15名

29日：堀部邸企画展関連講座「研ぎの実演」

①森 修（春日井たたら研究会）②木之下城伝承館・堀部邸 ③8名

5月

12日：青塚古墳まつり

②青塚古墳史跡公園 ③1400名

16日：堀部邸歴史文化会

①岡本利雄（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸

19日：古墳よ jazz を聴け！

②青塚古墳史跡公園 ③入館 47名

20日：ニッ里ねっと総会

②木之下城伝承館・堀部邸

26日：月津塾（堀部邸文化遺産塾）「消滅した尾張國山田郡幻想」

①赤塚次郎（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸 ③26名

6月

2日：ニッ里カレッジ「入鹿切れ、災害痕跡を歩く」

①西松賢一郎（大口町歴史民俗資料館）②犬山市羽黒周辺 ③18名

3日：青塚古墳を見守る会・古墳の清掃活動

②青塚古墳史跡公園 ③18名

9日：青塚こども教室「親子で遺跡ウォーキング in 栗栖」

①大塚友恵（ニッ里）②犬山市栗栖周辺 ③13名

16日：犬山市総合防災訓練「入鹿切れパネル」出展

②内田防災公園

20日：堀部邸歴史文化会

①岡本利雄（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸 ③10名

26日：入鹿切れ慰霊祭

②入鹿池周辺 ③5名

7月

1日：「古墳よ jazz を聴け！」

②青塚古墳史跡公園 ③入館 32名

14日：猪之子座「上方落語 九雀亭」

①落語・桂 九雀ほか ②木之下城伝承館・堀部邸 ③33名

15日：「古墳よ rock を聴け！」

②青塚古墳史跡公園 ③入館 54名

25日：堀部邸歴史文化会「塔野地熊野神社南宮の古文書」

①高橋幸子（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸 ③9名

28日：月津塾「金仏の鍍金技法を知る」

①青山正治（産業技術史名古屋研究所）②木之下城伝承館・堀部邸 ③18名

28日：青塚こども教室「青塚古墳見学会」

①大塚友恵（ニッ里）②青塚古墳史跡公園

8月

1日：青塚こども教室「青塚で草木染め」

②青塚古墳史跡公園 ③13名

5日：石上げ祭り「瀬波里連」

②尾張富士大宮浅間神社 ③14名

8日：青塚こども教室「青塚古墳見学会」

①大塚友恵（ニッ里）②青塚古墳史跡公園 ③17名

18日：夏休みこどもカルチャー講座「東之宮古墳のアクセサリーを作ろう！」へ出店

②犬山市南部公民館

19日：青塚こども教室「樹木のお話と樹木プレート作り」

①木村眞一郎（自然観察指導員）②青塚古墳史跡公園 ③10名

22日：堀部邸歴史文化会「八巻の四季」

①麻野純子（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸 ③12名

25日：青塚こども教室「古代繊維作り」

②青塚古墳史跡公園 ③10名

9月

1日：「古墳よ jazz を聴け！」

②青塚古墳史跡公園 ③入館 21名

9日：月津塾「犬山の狛犬を切り取る」

①中野耕司（写真家）②木之下城伝承館・堀部邸 ③22名

17日：猪之子座「安井正規コンサート」

①電子オルガン・安井正規 ②木之下城伝承館・堀部邸 ③45名

22日：月津塾「ようこそ うるしの世界へ」

①浅井啓介（漆芸家）②木之下城伝承館・堀部邸 ③19名

15-10月14日：鎌田祐一星空写真展「深夜の青塚古墳」

②青塚古墳史跡公園

26日：堀部邸歴史文化会「諏訪神社」

①山崎 隆（ニッ里）②木之下城伝承館・堀部邸 ③15名

10月

8日：瀬波史楽座「イヌカビデの劔」

①古代音楽集団「夢舞台」ほか ②青塚古墳史跡公園 ③230名

9日：栗栖プロジェクト 栗栖小学校歴史学習

②栗栖小学校

11日 - 翌年9月30日まで：【尾張旭市】民具企画展「うねうね瀬戸街道変わりゆく道筋」

②スカイワードあさひ

13日：栗栖プロジェクト 試掘調査見学会

②犬山市栗栖 ③18名

上野古墳群と7世紀の邇波「前刀」

NPO法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

赤塚 次郎

1. 上野古墳群

愛知県犬山市に所在する「上野（かみの）古墳群」は、早くからその存在が知られ、約30基ほどの古墳が分布すると考えられてきた。古墳群がある上野地区は、犬山城下町から西に段丘崖を降った上坂地区に所属し、犬山扇状地を流れる木曽川沿いの微高地上に位置する。江戸時代

以前の木曽川の流れは、犬山扇状地の扇要である犬山から複数の小河川に分流していた。その河川が大きく大地を刻み込み、窪地状の地形を形成するとともに流路にそってやや高まり（微高地）が造られてきた。上野古墳群はこうした小河川が複雑に流れ落ち、その間の高まり（微高地）を利用し群集墳が形成されてきた。

当地域は犬山街から段丘を降った場面であり、昭和60年代まで、桑畑などの畑地が広がる田園地帯であっ

たが、近年は宅地開発に伴い大きく改変し、道路と街区が整然と広がる街へと変貌をとげた。それにともない僅かに残っていた古墳群の痕跡も、残念ながらほとんど消失してしまった。

2. 調査の経歴

昭和33年、道路工事の土取りにより、上野第1号墳が破壊された際、石棺が見つかり急遽調査が行われた。1号墳（通称機織塚・雁追塚）は上野古墳群中で最も大きな墳丘を残していた古墳であったようで、東西9メートル、南北7・2メートル、高さ1・7メートルで方形状を呈していた。墳丘の内部には横穴式石室が存在し、残存した部分で長さ6・7メートル、幅1・1メートル。前室・後室・羨道をもつ、典型的な、当地区の河原石積の複室構

造をもつ横穴式石室であった。石室の内部には刳拔式の家形石棺が存在し、複数の埋葬人骨が、比較的良好な状態で発見されている。家形石棺は上野古墳群では唯一の例であり、現在犬山中学校に保管されている。7世紀代の遺物を伴い、上野古墳群の最盛期段階の古墳と位置付けられる。

その後、昭和41年に第2・4号墳、昭和42年に第3号墳、昭和47年には第5号墳が「学術調査」された。また昭和52年には第6号墳と岩神古墳（西石神第1号墳）、さらには坂下第1号墳も調査されている。昭和55年には第8号墳が発掘調査

された。こうした一連の調査成果の内容は、犬山市から刊行されている各報告書に譲るとして、調査全般においていくつかの課題が残されている。

まず、調査地点の座標値測点がなく、現地表面での任意点に基づく測量であったため、全体の分布状況が極めてわかりにくく、不明確となってい

る。第2点は、調査時点で残存していた小規模な墳丘盛土の測量図がなく、さらには墳丘の形状を想定できる情報も皆無といってよい。ほぼ主体部である横穴式石室のみの調査記録だけが残された。当時の調査環境下では十分な対応が困難であったと推測するが、周溝等の調査事例がないのはいかにも残念である。最も基本的な墳形が不明となっている。断片的な石室図等と出土遺物が残されており、地元で調査を主に担当した高木志朗氏によって整理されている犬山市史での総括が、貴重な情報源となっている。（註1）



図1 上野遺跡位置図
(昭和30(1955)年・国土地理院1/50000地図)

3. 上野古墳群の分布

このような状況を踏まえ、ここではまず「上野古墳群」の分布状況を整理するところからはじめたい。大きく変貌した上野地区の現状と、上野古墳群の分布から見えてくる古代の景観を推測することから、上野古墳群のもつ歴史の意味に近づいてみ

たい。

そこで、市役所に残る昭和52年の地籍図をたよりに、各報告書に記載されている地番と照合しつつ、大まかな古墳群の分布の実態を復元してみることとする。昭和41年の分布調査による「上野古墳群一覧表」が『犬山市史』史料編に掲載されており、まずはここからはじめることに

しよう。また昭和47年（1972）にまとめられた犬山高校地歴部による『地歴学報第9号』との照合を試みるが、いくつかの番地における齟齬が確認できるものの、大枠の推測は可能である。また当初は小字単位での古墳群の番号表記であったことがわかる。

いずれにせよ上野古墳群で、明確

な番号表記が1号から27号存在する。その全ての位置をおおむね推測し、分布図を作成したのが、第2図である。これを見ると大きく4つの地区に古墳の分布が偏ることがわかる。すなわち1号墳から2・5号墳にかけて、さらに少し離れて北側の岩神地区、そしてさらに北方で坂下1号



図2 上野古墳群分布図と旧河道復元
(基盤図は昭和48(1973)年・国土地理院)

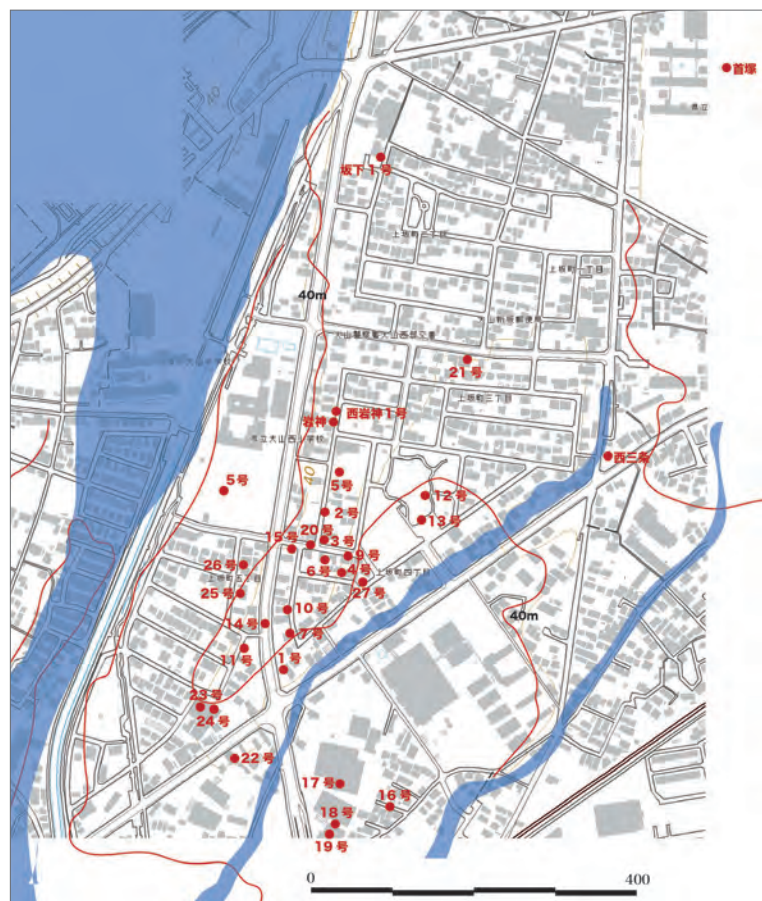


図3 上野古墳群分布復元案
(基盤図は平成30年代・電子国土web地図)

墳が分布することになる。周辺の旧地形を復元し、下位段丘からの湧き出る小河川の流れや、図4の昭和20年代の航空写真などから、上野古墳群が築造された場面がおぼろげながら復元することが可能である。

4. 上野古墳群の四つの支群

古墳時代終末期、6世紀末葉から7世紀前半期にかけて築造された「上野古墳群」は、おおむね30基以上の小規模な(円・方形?)古墳からなり、大きく四つの支群によって構成されていたようである。現在の土坂町南北線中央部全体に広く分布していたと推定することができる。その範囲は南北1キロメートル、東西幅40メートルほどの領域を推測したい。標高はおおむね40メートル。その中心は1号墳から5号墳が存在した「大門」「八幡東」「機織」地区と考えてまず間違いなからう。これを「機織」支群と仮に呼ぶと、20基近くが密集する地区となる。小河川を挟んでその南側には数基単位の「弥左畑」支群が分布する。「弥左畑」支群は昭和初期には、すでに多くが消滅し、150メートルほどの狭い

高まり上に造営された数基単位の古墳群であったと思われる。一方で「機織」支群の北側に隣接するかたちで、「岩神」支群が西側に傾斜する微高地面上に分布する。大岩が存在した「岩神」がその象徴的な存在であった。そしてやや離れて坂下1号墳が存在する。その調査成果から、周辺にも数基の石室構造が埋まっていることが推測されるようであり、あるいは岩神から坂下1号までの西斜面沿いに古墳の分布が広く点在していた可能性も推測できる。すると現在の土坂町を南北に走る現道を境にその東側の緩斜面に50基から60基ほどの古墳群の造営が、おぼろげながら見えてくる。

5. 前刀・沼郷の古墳造営

やや大胆に上野古墳群を復元したが、整理すると以下のようになる。標高40メートルの木曾川から分流した小河川脇の微高地上に、南北約1キロメートルほどにわたり広く古墳が営まれた。古墳時代終末期の6世紀末葉から7世紀前半期にかけて約50から60基ほどが復元できる。そこで、次に上野周辺の古墳群を



図4 上野古墳群周辺の地形(国土地理院の空中写真・昭和22(1947)年)

概観することになろう。まず木曾川本流の右岸には「各務原台地・各務野」の南端部に複数の古墳群が存在する。その中で特に注目されるのが前方後円墳を含む大伊木地区や大牧地区の古墳群である。一方で左岸には上野古墳群以外には、やや上流で内田古

墳群が存在する。ただ扶桑町斎藤・高雄地区にも古墳群の存在が知られるが、どちらかというと上野古墳群より古く遡り、5世紀後半から6世紀にかけての古墳時代後期に所属するものを中心であると考えられる。

一方で集落遺跡を見てみると、江

南市般若地区から和田勝左地区、そして扶桑町高雄地区に古墳時代後期から律令期の遺跡がまとまる傾向が読み取れる。さらに犬山扇状地最大の集落遺跡群「余野遺跡群」や小口遺跡群など五条川中流域に集落遺跡を中心とした営みが見えてくる。これらの地域が邇波郡「前刀」郷や「小口」郷「上沼」「下沼」郷の領域であったと考えると、この集落分布が基礎となり、郷域が誕生する起因となっていたものと考えられよう。

6. 大伊木・大牧古墳群と山那の渡

木曽川右岸の段丘崖に分布する大牧古墳群・大伊木古墳群、これらは各務野の台地面北端部を利用した古墳造営である。そこから見える風景は、あくまで原野が広がる北側の各務野を意識したものではなく、木曽川が流れ落ちる南側からの眺望、犬山扇状地側に造営主体があつたこと、その立地や地勢を見ても明らかであろう。彼らの集落域は、そこか

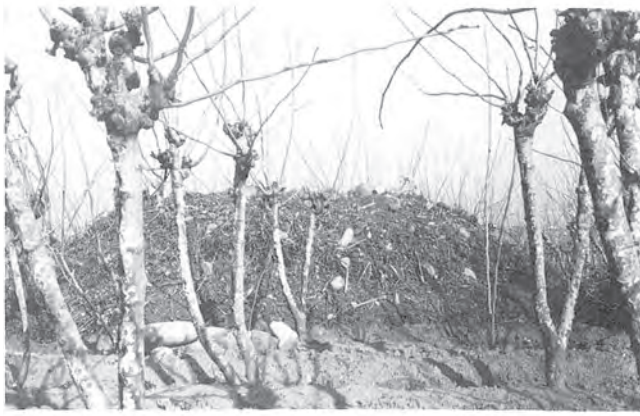
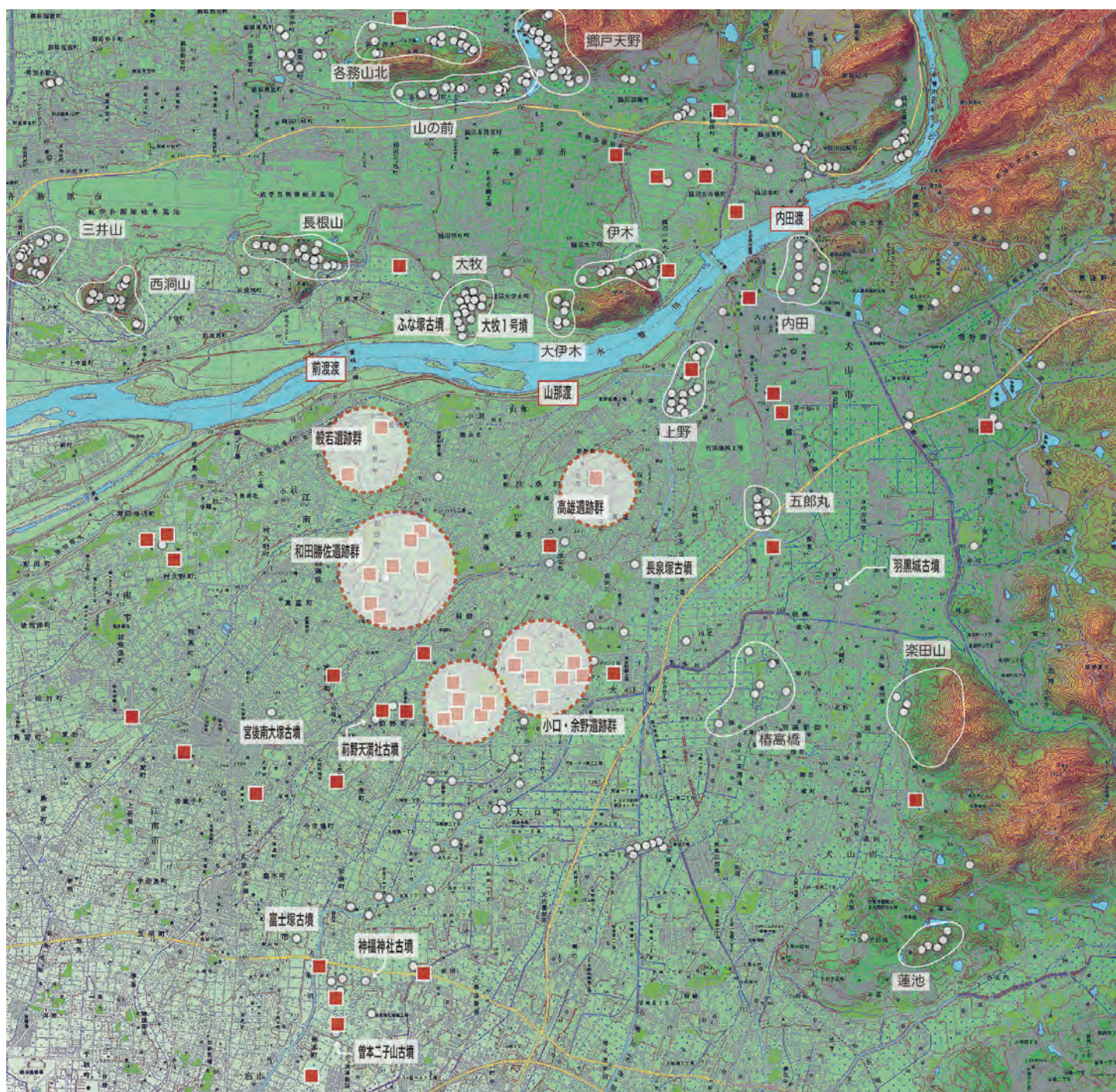


図5 上野1号墳、墳丘と石棺出土状況
(昭和33(1958)年・報告書より)

ら眺めることができる地域であり江南・扶桑から大口に展開する集落遺跡の可能性が高い。また注目したいのが山那地区や小淵地区の渡の存在である。やや時代が降るが、承久の乱で「尾張川」九瀬の渡しを中心とした戦。鵜沼・板橋・池瀬・摩免戸(前度)などであるが、板橋・池瀬を伊木と山那付近と考えるのが妥当であろう。式内社「山那神社」が鎮座するこの周辺には、現在も中世期の遺物が広く分布し、山那切れの伝承とともに洪水多発地帯といえる。古代の集落遺跡はその下層に埋没している可能性が高い。あるいは高木遺跡や高雄地区の遺跡群を想定することもできる。鵜沼・内田の渡には内田古墳群と鵜沼の古市場遺跡群が対応し、前度の渡には般若遺跡群と長根山古墳群が対応する。このように見ていくと大牧古墳群における大牧1号墳やふな塚古墳の最後の前方後円墳の造営(6世紀末葉)とその主体は、木曽川左岸に集落を構える「前刀郷」との関係から考えていく事が重要と言えよう。そこには「邇波氏」との同族関係をもつ「前刀氏」が割拠した場面とほぼ一致する。

7. 邇波臣と前刀氏

犬山扇状地を領域とした「邇波郡」には古墳時代前期から中期にかけて、大型の前方後円(方)墳がつぎつぎに造営された。こうした力強い動きは、最後の前方後円墳である「妙感寺山古墳」をもつて急速に終息することがわかつていく。かわつて庄内川水系やアユチ瀾周辺に大型前方後円墳が造営されはじめ、地域最大の前方後円墳「断夫山古墳」へとつながっていく。この動きが「尾張氏」の台頭とその活躍を反映したものであることは間違いなく、尾張氏の動きはおおむね5・6世紀を中心とするものであるが、邇波郡域にはこうした時期、目立った古墳造営は見られない。これを邇波にいち早く割拠した集団が、新興の尾張氏の動向の中に収斂されていくと考える見方があるが、それは尾張氏の祖である建稲種と邇波の大荒田命の玉姫との関係を見据えた見方かと思われる。しかし律令期になつても邇波郡・葉栗郡には尾張氏の影響がほとんど見られないのも事実である。それは郡別の氏族分布などからもうこうした評価



がなされているのは留意しておく必要がある。(註2)

したがって邇波群内でふたたび古墳造営が認められる時期が、ここであたためて問題となってくる。まず注目したいのが、江南市・扶桑町などの地域で、前方後円墳の可能性が指摘される宮後南大塚古墳や前野天満社古墳、また山尻地区などの出土遺物群である。その評価からは5世紀中頃から6世紀にかけて、にわか古墳群が造営されはじめていく様子が見えてくる。その後、6世紀末から7世紀になって、木曾川兩岸や犬山台地面などで群集墳の造営が増加することになる。

まず集落遺跡周辺部の共同墓地に先祖の霊を祀る伝統的な造営形態から、やがて河の彼岸や特定の山・峰を見立てて家族墓を営む集団墓の開発へと群集墳の造営地が移動していくことをしめしているようにも思われる。いずれにしても5世紀から6・7世紀にかけての犬山扇状地北部域の古墳造営の動きの中で、最も重視される場面が、江南市般若から大口町余野・扶桑町にかけての領域である点は動かない。この地にかつて反

映した邇波氏の末裔として、新たに登場したのが「前刀（さきと）」氏ということになるう。

8. まとめにかえて

以上、上野古墳群の分布とその立地などから、木曾川中流域の古墳時代後期から終末期の集落・古墳群の動向をやや粗雑ではあるが整理することができた。その中で見えてきた事項は次のようにまとめることができる。

1…古墳時代5世紀になり江南市・扶桑・大口町にかけて、まずは集落遺跡に近接して、やや規模の大きな古墳、宮後南大塚古墳などの前方後円墳や円墳などが造営されはじめた。

2…6世紀末から7世紀にかけての古墳時代終末期にいたり、あらためて木曾川右岸や犬山台地面端部に群集墳が次々に造営されはじめる。その一つが上野古墳群でもあった。

3…これらの古墳造営を指導した集団を、古墳時代前期からこの地に根づいてきた邇波臣、その末裔である「前刀」氏であると推定した。山那の渡を見据えた大牧1号墳・ふな

塚古墳などの最後の前方後円墳を造営する大牧古墳群は、古墳と集落遺跡の関係から前刀氏の奥津城であったと、まずは想定しておきたい。

【註】

註1…上野遺跡出土遺物の一部は、現在「青塚古墳ガイダンス施設」展示室にて保管・管理。

註2…『愛知県史』通史編1では「尾張氏の分布が中島郡・海部郡・春部郡・山田郡・愛知郡の五郡に限られる」「葉栗郡・丹羽郡には、尾張氏が認められず、」という指摘がな

されている。（丸山裕美子・福岡猛志・城ヶ谷和広2016『第6章 第1節尾張・三河の郡と里（郷）』、『愛知県史』通史編1原始・古代）

地籍図関係資料については中村篤史さんにご配慮賜った。

参考文献

高木志朗・宮川芳照・杉崎章1968『上野古墳群』犬山市教育委員会

犬山高校地歴部1972『地歴学報第9号』

宮川芳照編1978『上野第6号墳・岩神古墳・坂下第1号墳』犬山市埋蔵文化財調査報

告 第4集

高木志朗1983『後期古墳』『犬山市史料編3』考古・古代・中世

各務原市・犬山市交流事業提携記念1990『木曾川兩岸に栄えた古代文化』各務原市埋蔵文化財調査センター

赤塚次郎2001『古墳時代の江南』『江南市史 本文編』

渡辺博人2003『大牧1号墳発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第37号

愛知県史編さん委員会2005『愛知県史資料編3 古墳』考古3



図7 大牧古墳群（渡辺2003より）加筆

犬山焼の意匠にみる「仙境図」を考える

(公財) 瀬戸市文化振興財団 青木 修
愛知県陶磁美術館 佐久間真子
NPO 法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 中野耕司



1 はじめに

本稿は、赤絵と雲錦手に代表される上絵付を特徴とした犬山焼の大皿あるいは大鉢の中で、「仙境図」と呼ばれる意匠を採り上げ、その「本歌」となる中国・漳州窯で生産された呉州赤絵大皿が日本へ輸入され、その後の需要に応じて国産陶磁器の生産過程で取り組んだ「本歌取」あるいは「写し物」の完成に至る類似作品から、文様構成などを概説する研究ノートとして提示するものである。ただ、これまで国内で確認されている仙境図の大皿・大鉢の類は、中国・漳州窯と九州嬉野市・吉田窯の作品を除くと、その数は少なく、確論に繋がる比較・検証を行うには、まだまだ不十分である点は否めず、ここでは作品解題の序段であることをご理解いただきたい。

江戸時代、尾張犬山焼に関わる

文献の内容に従えば、文化七年(1810)、犬山城下町の商人・島屋惣九郎が窯株を所得し、旧余坂村丸山新田(愛知県犬山市丸山)に窯炉を構え操業が開始されたことが定説となっている。その背景には、各藩の殖産振興政策への取り組みの結果として(註1)、藩窯と民窯における窯業生産が行われるようになってきたとする見方が示されている。ただ、瀬戸窯を抱える尾張藩の領域において、新規での窯炉構築を可能にした犬山焼の体制は、表向き民窯の範疇にあつたとしても、七代犬山城主・成瀬正寿の庇護は少なくは無いと見るべきで、藩窯と言えないまでも優遇された環境にあつた可能性は高いと考えている。

さて、江戸時代の犬山焼は、創業から約二十年間に制作された作品を抽出することができず、その生産内

容は未だ解明されていないのが現状である。しかし、天保年間(1830)に入り、それまで陶工(陶師)として参加していた加藤清蔵が窯株を譲り受け、赤絵師の松原惣兵衛や道平、そして細工師の兼松所介らを招聘し、天保八年(1838)までには赤絵大皿を完成させたとは判断できる作品が確認されている(註2)。そして、尾張藩の絵師として犬山の職にあつた近藤秀胤(清九郎)の参加もあり、幕末までには仁阿弥道八の手掛けた京焼の意匠から影響を受け、桜と紅葉を対峙させた構図を採用した雲錦手と呼ばれる文様を完成させ(註3)、この頃には「仙境図」の意匠も採用していたとする仮説を考えている。

2 仙境図とは

中国発祥と伝わる仙境図に描かれ

る仙境とは、「仙人の住む土地。俗界を離れた清浄な地」(広辞苑)とある。付け加えるならば、主に高い山の上や天上、理想的な土地を意味し、「桃源郷」と表記することも可能である。仙人とは、仏教を除く中国本来の虚像ともいうべき姿で、修行を重ねた後、神に近い存在となつた者たちの総称と理解され、神でもなく人間でもない姿がそこにある。また、仙人に関わる記述は、中国への仏教伝来から間もない頃、前漢時代末に遡るのが初出と伝えられている。この様な理想郷を意味する仙境を描く画題は、中国北宋時代頃から積極的に採用されてきたと言われ、陶磁器における意匠の視点に立てば、中国・漳州窯で明時代末に生産された呉州赤絵大皿の中に登場することが確認できるようになった。桃山時代の終わりから江戸時代の初めにかけて輸入された漳州窯の大皿は、各藩の大名など上流階層の間では、威信財としての存在感を確立するに至つたのである。漳州窯の大皿の中にあつた「仙境図大皿」も同等に評価され、宇和島藩伊達家に伝わる所蔵品(註4)に含まれている点

は注視してよいだろう。その人気を裏付ける様に、九州嬉野市・吉田窯では江戸時代前期に中国陶磁器を模倣して生産が行われ、漳州窯の大皿の流通を補完することになったのである。ただ、単なる模倣品としての作品ではなく、海外での評価も高く、輸入陶磁と同等の付加価値を備えていたと考えるべきである。

3 犬山焼と各窯業地の仙境図

ここでは、各窯業地で生産された仙境図の意匠を持つ大皿・大鉢を紹介するが、基準となる犬山焼をはじめに扱い、比較対象とした漳州窯、吉田窯、三田焼、笹島焼は概ね窯業地の成立順に従った。なお、漳州窯は、桃山時代後半から江戸時代初め頃、吉田窯は江戸時代前期、そして、犬山焼と三田焼、笹島焼は、江戸時代後期（19世紀前半代）にそれぞれ帰属する。

a 犬山焼（写真1）

愛知県陶磁美術館（浅井藤雄氏寄贈）所蔵の仙境図大鉢である。

陶器質の作品で、口径は25cm前後を測る。厚手に仕上がる高台を有し、体部下半は丸く、口縁部の外反は無

い。器壁は、高台に限らず全体的に厚手に仕上げられているため、作品を持ち上げると重く感じる。これは、感覚的な基準ではあるが江戸時代に作られた犬山焼の特徴として指摘したことがある。内面は、口縁部に一重線、見込みの外周には二重線がロクロ回転を利用して施されている。文様は、底部に相当する見込みと体部から構成され、前者には仙境図の図、後者は四分割され、窓絵と印判文が描かれ、体部外面にも同じ意匠が配置されている。窓絵と見込みの図は黒色で輪郭を描き、緑色の彩色が施されている。印判文と外周線は、いずれも赤色の釉薬が使用されている。仙境図の図は、仰角の視点で描かれ、手前の空間と奥の山々は陸橋で結ばれている。中央付近には楼閣と思われる建物と船で行き交う情景や人物などが描かれている。特に、画面右側に立つ人物は、遠近法の技法に反して、比較的大きく描かれている。窓絵は、花や葉で作られた装飾用のリースを連想させる枠の構図で、その内側の絵は明確に識別できない。印判文は、文字としての判読はできない。

b 漳州窯（中国・写真2）

愛知県陶磁美術館（加藤恒夫氏寄贈）所蔵の仙境図大皿である。漳州窯は、福建省南部の漳州地域に分布する明時代の窯業地で、赤絵や染付などに代表される多種多様な磁器製品を生産した。なお、日本では呉州赤絵、呉州染付あるいは呉州手の名称として理解されている。

磁器質の作品で、口径は38cm前後を測る。輪高台を有し、体部下半は丸みを帯び、口縁部は大きく外反し、水平方向に収まるものが多く、他に口縁部が外反しないものも確認されている。高台の内側は、釉薬を投げ付けた様な所作で行う「捨て掛け」と呼ばれる技法が認められる。内面は、見込み外周に細い二重線が一周している。体部内面は、四分割され、窓絵と印判文が交互に描かれ、見込みには仙境図の図が詳細に描かれている。窓絵と見込みの図は、黒色で輪郭線を描き、濃青緑色で彩色され、部分的に濃淡が使い分けられている。印判文と外周線は赤色である。仙境図の図は、手前の空間には三重の楼閣が三棟描かれ、奥の山々までは細い陸橋が続いている。中央付近に



写真2 漳州窯 仙境図大皿
愛知県陶磁美術館所蔵（加藤恒夫氏寄贈）



写真1 犬山焼 仙境図大鉢
愛知県陶磁美術館所蔵（浅井藤雄氏寄贈）

は、陸橋を挟んで楼閣が、右側には人物、左側には船が浮かんでいる。窓絵の枠は、火炎を表現していると言われ、その内側には風景の一部を焦点したそれぞれ異なる意匠が配されている。印判文は、判読しかねるが文字としての解釈は残されているものと思われる。

c 吉田窯（佐賀県嬉野市・写真3）

佐賀県立九州陶磁文化館所蔵の仙境図大皿である（註5）。吉田窯の磁器生産は、伊万里焼とも呼ばれた有田磁器の成立から約40年後、1650～1660年代とされ、肥前では後発的な創業とされている。吉田窯の色絵磁器は、有田とは異なる様式が指摘され、仙境図大皿も代表的な作品のひとつに挙げられている。

磁器質の作品で、口径は41cmを測る。輪高台を有し、体部下半は丸く、口縁部の外反は弱い。体部内外面は、乳白色に仕上がる全面施釉の後、高台端部のみ拭き取りが施されている。見込みの外周線及び窓絵・印判文の配置など、漳州窯の作品に類似する点が多い。使われる釉薬は、使用の度合いを考慮しても、明青緑色と明赤色として確認できる。窓絵は、す

べて同じ構図で描かれ、印判文は文字として判読することはできない。

d 三田焼（兵庫県三田市・写真4）

古三田青磁・三田焼保存研究会所蔵の仙境図中皿である。三田焼は、宝暦年間（1751～1764）に開窯し、文化年間から天保年間が最盛期と言われ、京都の欽古堂亀祐が招聘されると、型打技法や青磁（釉）の指導を受けることになり、その結果、いわゆる三田青磁が誕生するに至った。特に型打成形の作品の評価が高く、他には染付や赤絵製品など数多く知られている。

三田焼の組成としては数が少ない、陶器質の作品で、口径は15cmを測る。輪高台を有し、体部は開きながら立ち上がり、口縁部の外反はほとんど認められない。高台の内側を含め、全面施釉の後、高台端部のみ拭き取りが施されている点が特徴である。内面は、口縁部と見込みの外周にはそれぞれ一重線が一周している。中形の器であるが故、体部内面は、四分割ではなく三分割で表現されており、窓絵と印判文はほぼ均等に配されている。仙境の図は、基本的に漳州窯の作品を踏襲しながらも、手

前の空間の楼閣は一棟のみ描かれている点で異なる。窓絵は、犬山焼の作品に見る構図を踏襲しつつもその意匠を識別するのは困難であり、印判文も本来の解釈からかけ離れた幾何学的な表現に変化している。

e 笹島焼（名古屋市中村区・写真5）

個人所蔵の仙境図大皿である。笹島焼は、文化年間（1804～1817）、牧朴斎が開窯し、軟質施釉陶器を主体とする、いわゆる文人志向の趣味性が高い茶道具類を得意としたやきものである。ここで紹介する仙境図大皿は、笹島焼の器種組成からも珍しい事例とすべき作品であり、後述するように緻密な描写で表現され、絵画に精通した人物が絵付にかかわった可能性が高い。

軟質施釉陶器の作品で、口径は36cmを測る。輪高台を有し、体部下半の丸みや口縁部の形状など吉田窯の作品に共通する。内面は、漳州窯あるいは吉田窯の作品の構図に類似するが、窓絵と印判文が大きく描かれ、見込みの外周線は黒色の細い二重線が一周している点で異なる。窓絵と仙境の図は緑色、印判文は赤色の彩色が採用されている。仙境の図は、遠近法



写真4 三田焼 仙境図中皿
古三田青磁・三田焼保存研究会所蔵



写真3 吉田窯 仙境図大皿
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

と呼ばれる技法を忠実に採用している点が特徴であり、手前の山々に建つ三棟の楼閣に対し、奥の山々は小さく、陸橋の表現も細く描かれているため、構図の距離感が解りやすい。左側の人物は、他の作品では強調して描かれる傾向にあったが、本作では非常に小さくなっている。窓絵は、漳州窯の作品で解説される火炎に相応しく、躍動的な表現であり、その内側の意匠も緻密に描かれている。印判文は、文字に置き換えることが可能であるかは判断しかねるが、丁寧な描写である点は明らかである。



写真5 笹島焼 仙境図大皿 個人蔵

4 まとめ

漳州窯と吉田窯の仙境図大皿を除くと、今のところ確認されている作品が少なく、端的に言えば、各窯業地の生産量の比率に関係する可能性も考えている。江戸時代前期における大皿は、大名をはじめとする上流階層の威信財としての需要があった。一方、江戸時代後期では、長崎の卓袱料理や高知の皿鉢料理などの影響も浸透し、再び大皿・大鉢に注目が向けられ、犬山焼や三田焼でも生産が行われるようになった。つまり、大皿需要の再燃に向け、当時から見れば二百年ほど前に流通した漳州窯の赤絵製品の模倣から取り掛かったことになる。ただ、幕末頃には京焼の強い影響もあり、雲錦手と呼ばれる和様の意匠が採用され、犬山焼では特徴的かつ代表的な作品へと進化させたのである。春の桜と秋の紅葉を対峙させて表現した雲錦手の器は、「春秋に富む」として若く希望に満ちている情景が込められており、従来までの模倣に留まらず、作品に込める目的や意識などが明確化した点に大きな変化が認められるようになった。

たとえるべきかもしれない。

本稿で紹介した仙境図は、空想と現実の狭間の世界と表現され、人々の長寿を一番の幸福と考える中で、その思いは、仙人としての虚像に託され、不老不死を願う縁起物の器として採用されたと考えられる。先に示したように、仙境図の大皿は江戸時代前期の威信財の中に含まれていた。当時、その内容についてどこまで理解していたかは知る由もないが、江戸時代後期における中国文人趣味の流行は、中国画に込められた様々な背景や意味を理解する中で、仙境に描く世界を大皿や大鉢を素材として採用し、宴席を演出する縁起物の作品として復刻を成し遂げ、犬山焼としては、その存在感を示すことになる特徴的な意匠となった。

【追記】 本稿は、佐久間真子が「あいちの考古学2018」で発表した内容（註6）と愛知県陶磁美術館開館40周年記念テーマ展示 特別協同展『犬山焼・最新の研究成果とともに』の成果を基に研究ノートとして執筆し、連名での提示とする。ただ、内容に関わる文責は青木修に

託されている。本稿の作成に当たり、犬山焼ミュージアム、井上あゆこ氏、鈴木智恵氏、安藤悟氏、藤田紗樹氏の協力を得ることができた。また、本文中の掲載写真は、愛知県陶磁美術館、佐賀県立九州陶磁文化館、善入達甫氏（古三田青磁・三田焼研究保存会）、前田博氏の配慮を頂いた。記して感謝を申し上げる。

【註】

註1.. 檜崎彰一「東海・甲信越の陶磁」『日本やきもの集成2 東海甲信越』1982平凡社

註2.. 青木修「犬山焼研究における現状と課題」『瀬波 第3号』2016 NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

註3.. 青木修 佐久間真子 井上あゆこ 中野耕司 鈴木智恵 安藤悟 愛知県陶磁美術館 開館40周年記念テーマ展示 特別協同展『犬山焼・最新の研究成果とともに』2019 愛知県陶磁美術館 犬山焼ミュージアム

註4.. 『有田焼総業400年記念事業 特別企画展 白き黄金・有田・伊万里・武雄・嬉野の磁器の美と技』2014 佐賀県立九州陶磁文化館

註5.. 註4に同じ

註6.. 青木修 佐久間真子 井上あゆこ 中野耕司 鈴木智恵 安藤悟「犬山焼にみる『仙境図大皿』を読み解く」『平成30年度考古学セミナー あいちの考古学2018資料集』2018 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

国史跡志段味古墳群での活動を前にして

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 服部 哲也

1. はじめに

新しき令和時代の始まりに、NPO法人ニワ里ねつとでも新たな活動を始めることとなりました。「歴史の里しだみ古墳群」に指定管理者グループの一員として参加することとなったのです。ここでは、参加に至るまでの経緯とこれからの課題や期待を綴っておこうと思います。

志段味古墳群は名古屋守山区上志段味に広がる70基ほどの古墳群です。特徴は前期から後期にかけて連綿と古墳が造り続けられていること、山頂から山裾そして段丘と地形を違えて立地していることなどがあげられます。その範囲は広大で東谷山山頂から西の低位河岸段丘面までの、東西1・7km南北1kmに及びます。

2. 志段味古墳群整備の経緯

白鳥塚古墳は昭和47年に国の史跡となりましたが、その西側に展開する大久手古墳群のエリアを、保存整備する計画が昭和の終り頃に示されました。これは、古墳群のある志段味地区において、大規模に実施される土地区画整理事業を受けてのこと、昭和63(1988)年の「名古屋市新基本計画」には「歴史の里」の名でその計画が記載されます。しかし、その後10年余は具体的な進展がないまま経過し、ようやく、平成12年の「名古屋新世紀計画2010」に「歴史の里」が再度示されました。その後、大久手古墳群のエリアを「歴史の里」として整備するのみならず、志段味古墳群全体を国史跡に追加登録する

方向が示され、平成17年度に区画整理事業の仮換地指定がされてからは一気にその計画が進みます。平成17～20年度にかけては名古屋市教育局が古墳群の範囲確認調査を行い、その結果に基づいて、平成21年「歴史の里」基本構想。平成26年「歴史の里」基本計画を策定。平成26年には6古墳の国史跡追加指定へこぎつけ、名称も「国史跡志段味古墳群」と改めました。さらに平成27年に「国史跡志段味古墳群保存管理計画」を策定し、古墳群の整備を順次進めます。そして、平成31年にガイダンス施設「SHIDAMU(しだみゅー)」をオープンするにいたり、保存整備事業の一つの区切りとしました。最初の「歴史の里」構想からは実に30年余、ちょうど平成の時代すべてを整備に費やし



たといっても過言ではないでしょう。

3. 指定管理者への参加

名古屋市は、「SHIDAMU(しだみゅー)」の完成を契機に、古墳・緑地を含めての一体的管理、サービスの向上、経費の削減、



写真1 しだみ古墳群ガイダンス施設「SHIDAMU(しだみゅー)」



写真2 ボランティアガイドさんの活動

業務の効率化を目指すため、管理活用業務は指定管理とすることとし、平成30年4月に公募をおこないます。

ニワ里ねつとには、応募を検討中の中電興業（株）さんより共同体での参加が打診され、その後、

岩間造園（株）、（株）TONZAKOデザイン（旧とんざこ設計室）2社を加えた、4社による共同体「しだみの里守グループ」として申請することとなりました。そして平成30年8月、申請した5団体のうちから「しだみの里守グループ」が選定され、平成31年3月名古屋市と協定締結にいたっています。

選考委員会では、①共同体形式に高い実効性を感じられること、②地元を大事にしたまちづくりの観点が感じられることの2点が特に高評価されました。

「しだみの里守グループ」内での担当する主な業務は、中電興業がガイダンス施設「SHIDAMU（しだみゅー）」の管理運営（グループの代表企業）。岩間造園が古墳緑地の管理運営。ニワ里ねつとが学術的部門と地域連携。TONZAKOデザインが体験農園部門となっ

4. 今後の方針と期待

「地域で活動」のいっ

ニワ里ねつとの活動理念は「文化遺産のみえるまちづくり」であり、それは地域の遺跡や文化財を現在のまちづくりに生かしている！という活動です。こうした活動の実践は地域に根差すことが大前提で、「邇波（丹羽）」という地域を組織名に冠したことも地域の重要性を意識してのことでありま

す。逆に言えば「邇波」の地域を超えて活動するほどの力は無いと判断したことでもあり、分に応じて「風呂敷を広げた」ともいえましよう。そして活動10年、ようやく「邇波」のいくつかの地区で、地元の皆さんの顔が見える活動ができつつある実感を持てるようになってきました。

他方、「邇波」を離れた地での活動も行っていました。これは、私たちの活動に共感された行政の担当者からの依頼が多く、地域に根差した活動が十分できないジレンマを感じながらも、地域に根ざすことの大切さを、その地元に伝えること、種をまくことはできると信じて行ってきました。今回は隣の春日郡も飛び越えた山田郡志談郷での活動となりますが、依頼されてではなく自らの意思で立候補した点がこれまでとは異なります。より責任が高まっているともいえましようが、なんとか志段味古墳群を地元の人が「地域の宝」と思う心を育む活動をしていきたいと思っています。

「ボランティア」のこ

そして、志段味古墳群を「地域の宝」とするためには、「地元」の理解に加えて「サポーター」の存在が不可欠です。名古屋市は今回の運営にあたり、古墳ガイド・展示解説・ワークショップの実践をボランティアで行う方針を示し、100人規模のボランティア募集を行いました。募集されたボランティアさんは、そのまま指定管理者に委ねられたのですが、この方たちにまずはサポーターになっていただく必要を強く感じています。ボランティアさんたちが「志段味古墳群」を大好きになっ

来場者に広げていく。そんな活動路線を敷いていきたいです。

「体感！」のこころ

志段味古墳群ガイダンス施設の正式名は「体感！しだみ古墳群ミュージアム」です。体験型施設とも謳っていますが、その実はロウ石の勾玉づくり、テラコッタ粘土のミニ埴輪づくり、マイキリ式の火起こし等々、これまで名古屋が実施していた「古代体験」と称したワークショップ（註1）に



写真3 これも体感！（古代衣装体験コーナー）

加え、展示室のレプリカや模型、埴輪片に触れられることを指すようです。もちろんこれらも「体感」ではありませんが、やはり、国史跡志段味古墳群に触れることでの「歴史体感」ができる工夫をこれからは考えていかなければならないでしょう。

ところで、古墳で「歴史体感」すること、整備の方法が大きく影響すると思っています。志段味古墳群では、①完全に復元：志段味大塚。②盛土して整形：大久手3号、大久手5号、大塚2号。③一部復元：中社、南社、勝手塚、白鳥塚、東谷山白鳥。④現状維持：大久手4号、西大久手、東大久手、大塚3号。以上の4つに整備の方法が異なります。ややもすると、この4つの違いを整備の4段階と勘違いされ、完全復元が最上で、現状維持は未整備と思われるがちです。ところが、①②は盛土して本物は地中に保存（註2）するため、見えている姿、実は原寸大レプリカと言っても過言ではないでしょう。一方、現状を維

持したままの古墳は、墳丘が崩れていたり転落した葺石が横に置かれていたりしています。すべて本物です。その為「1500年以上前の古墳時代の人々が運んだ土や石」を直接触られるのであり、そうすることで古代に思いを馳せることができるのではないのでしょうか（註3）。また、壊れた痕跡も、いつ誰が何のために壊したのかわかれば、その傷一つ一つも歴史を語ります。「古墳を体感」するだけではなく「志段味の歴史を体感」することにもつながるのです。レプリカは「知る」ことはできても「感ずる」ことにおいては本物を上回ることはできません。半壊状態の古墳も「体感！」にはとても有効であることを実践していきたいと思っています。

「保護と活用」のこころ

本年4月に文化財保護法が改正され、文化財の市長部局への移管



写真4 現状保存の大塚3号墳から完全復元の志段味大塚を望む

を可能としました。これは文化財の保護重視から活用重視への移行、文化財の観光活用の推進ともいえましょう。

本稿の執筆は、ガイダンス施設「SHIDAMU（しだみゅー）」オープン後1か月の時点です。オープンイベントには入場者が長蛇の列をなし、4月1ヶ月の入館者は2万人を超えました。名



写真5 オープニングイベントのーコマ（いらいとしおさんの壁画解説）

古屋市さんの強力な宣伝活動のおかげもあって、観光資源としては好調なスタートといえましょう。

ただ、古墳の見学者が急増していることも確かであり、史跡の保存と活用との均衡が崩れることも懸念されます。多くの見学者が墳丘の昇り降りをする一方で、獣道の踏み跡ができていく様子は全

国各所の古墳で認められますが、志段味古墳群の白鳥塚古墳ではそれを防止するために、新たに階段を敷設し備えました。古墳が醜悪になることには目をつぶり、保存と見学を優先した結果ともいえましようが、更なる見学者の増加が果たして1本の階段で押さえることができるのか!? 早くも新たな踏み跡の出現が懸念されています。ガイダンス施設に多くの方が訪れるのは大歓迎ですが、古墳の現状変化には常に気を配り、現地見学は保存を前提にした流動的な対応が必要となります。

5. おわりに

開館してから一番の驚きは子供連れのお客様がとて多いことです。特に2階の「こどもこふん」コーナーは、古墳型のラグマットや家具、古墳の積み木やマグネット、そして関連の絵本が置かれていて、いつでも大人気です。私も館内で一番のお気に入り、早速「読み聞かせイベント」の開催を館長にお

願い致しました。また、古墳エリアもベビーカーを押しながらの家族連れの姿がとて目立ちます。これだけ多くの子供連れの家族が「古墳」に集まっているのを見るのは私自身はじめてで、古墳群が実に「まったく」とした空気感に包まれることがとても新鮮でした。子供連れの家族の散策風景に、誰もが集える場としての可能性を大いに感じた次第です。

『古代ロマンを五感で体感』『学び』と「にぎわい」のある地域づくり」名古

屋市が示した「歴史の里」の基本理念です。「言うは易く行うは難し」をぎゅつと凝縮した一文です。高いハードルではありますが、焦らずじっくりと構えてこれから活動していきたいと念ずる今日この頃です。



写真6 大人気！「こどもこふん」コーナーの賑わい

【註】

註1…現在もとりあえずは引き継いで実施していますが、ワークシヨップの工夫も順次行っていきたいと思っています。すでにマイキリ式火起こしは、きりもみ式や火花式に変えていっています。

註2…盛土保存といえは聞こえはいいのですが、私には本物の古墳の「埋め殺し」にしか思えません。

註3…展示物の「触」においても、「本物のかけら」と「レプリカの完形品」どちらに古代を感じるができるでしょうか。やはり、かけらでも「本物」にその力があると思います。

犬山市立池野小学校 所蔵資料について

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

大塚 友恵



1. はじめに

NPO 法人ニワ里ねっとでは、犬山市立栗栖小学校にて地域の文化遺産を活かした歴史学習授業を、平成23年度から継続して行っている。この授業では、校区内にある遺跡の分布調査や、地域の遺跡に関連したワークショップなど、身近な遺跡を体感する活動を行ってきた。昨年度は、遺跡の試掘調査をニワ里ねっとが主体で行い、児童らにも見学をしてもらった。地域特有の文化遺産を歴史学習に取り入れることで、歴史的な事柄を、自分たちが住むまちと結びついた具体的な事柄として理解を深めさせ、また地域の文化遺産への興味・関心を育む取り組みとなっている。ここで重要なのは、「本物」の存在である。国宝の縄文土器を

教科書で見るよりも、「本物」の縄文土器の欠片を家の近くで拾う方が、子どもたちにとって印象的な出来事として記憶に残るであろう。こうした「本物」を活かした授業ができることが、ニワ里ねっとの活動の強みでもあると言える。

今後は、この栗栖小学校での活動をモデルケースとして、他の校区でも、地域特有の文化遺産を活かした学びの場を増やしていきたいと考えている。そのためには、学習の素材として活用できる「本物」の資料を見出し、評価することが必要であろう。

そこで本稿では、犬山市立池野小学校に所蔵されている考古資料について、今後、小学校の授業や子どもたちの学習の場に活かすことを視野に、その内容を整理し紹介したい。

2. 池野小学校所蔵資料について

池野小学校に所蔵されている歴史資料は現在、小学校玄関口のガラスケースに木製の展示キャプションとともに、展示されている（写真1）。子どもたちが毎日登下校の際にこの前を通り目にしているが、残念ながら全く気に止められていないようである。

所蔵資料の一覧を表1に示した。資料数は全25点で主に考古資料を中心に、「入鹿切れ」に関する資料もある。小学校への寄贈台帳（大正3年から昭和56年まで）には、大正から昭和初期にかけて、「古土器」や「曲玉」などの考古資料が地元住民から寄贈された旨が記載されており、所蔵資料の多くは地元住民から小学校に持ち込まれた可能性が高い。



写真1 資料展示のようす

池野小学校所蔵の資料に関しては、犬山高校地歴部の『地歴学報第9号』（文献1）に、「池野小学校にはこの地区から出土した遺物が保管されている。杯、長頸瓶をはじめ、現在長者町団地が造られている富士より出土した平瓶、提瓶、また十三塚から出土したとされる瓶などがある。」と紹介されている。また資料の一部は、上野古墳群の報告書（文献2）に「入鹿付近出土の遺物」および「池野古墳群出土の遺物」として紹介され

ている。「池野古墳群」という名称は他では使用されておらず、どのエリアの古墳群を指すかは分らないが、同頁に池野第1号墳、池野第2号墳として十三塚1号墳、2号墳の写真がそれぞれ掲載されていることなどから、十三塚古墳群も含めた入鹿池周辺の古墳から出土した遺物と考えられる。

本稿ではこれら所蔵資料のうち、上野古墳群の報告書掲載の入鹿池周辺の古墳出土と考えられる遺物9点を再実測し、紹介する。

入鹿池周辺の古墳については、現地踏査の所見から、5世紀後半～6世紀前半の竪穴系の石室が初期の横穴式石室を埋葬施設とする群集墳と、6世紀後半から7世紀前半に推定されるいわゆる後期古墳が多数存在することが報告されている(文献3)。また、入鹿池周辺の古墳では唯一発掘調査が行われた十三塚第3号墳は、横穴式石室を埋葬施設とし、須恵器の提瓶、細頸瓶、短頸壺や玉類、鉄鏃などが出土している。この出土遺物の時期は6世紀末から7世紀前半に相当する。

3. 池野小学校所蔵資料の紹介

蓋 (1) (図1)

須恵器蓋。口径8・4cm、器高4・2cmで、径3・2cmの鈕がつく。天井部の肩の部分は丁寧な面取りがされており、口縁部との境には明瞭な稜がある。口縁部の内側には沈線を有する。

杯蓋 (2) (図1)

須恵器杯蓋。口径12・8cm、器高4・7cmで完形の状態である。天井部は丸みをもち、1/2程度に回転ヘラ削りが施される。天井部と口縁部の境には稜がつくがシャープさはない。口縁部の内側に段がつく。

杯身 (3) (図1)

須恵器杯身。口径11・2cm、器高5・0cmで、完形の状態である。底部1/3程度に回転ヘラ削りが施され、底部は径4・2cmの平底となる。口縁部は緩やかに内傾し立ち上がる。返りの下にわずかに段がつく。

長頸壺 (4) (図1)

須恵器長頸壺。胴部最大幅11・7cmで、口縁は欠損している。

底部は静止のヘラ削りが施されているが、削りが荒く底部は1・1cmと厚い。肩に二重の沈線があり、その間に斜めの列線文が施されている。頸部は胴部に対してほぼ直立に取り付き、全体に力キメが施されている。

平瓶 (5) (図1)

須恵器平瓶。口径6・0cm、器高17・5cm、胴部最大幅14・9cmの平瓶で、全体に丸みを帯び、肩には明瞭な稜線は有しない。底部は回転ヘラ削りで調整されている。頸部はやや外に開き、2条の沈線が施される。口縁の内側には段がつく。体部に貼られたラベルには「第六号・九ノ六八・古土器」とある。また、出土地を記したラベルは不明瞭で読み取れないが、展示キャプションには「入鹿出土」とある。

細頸瓶 (6) (図1)

須恵器細頸瓶。胴部最大幅15・1cmの細頸瓶で、胴部は球胴形となる。口縁部と底部は欠損している。胴部の片面は全体に回転ヘラ削り調整が施され、側面には沈線が一条めぐる。また、頸部には2条の沈線が施される。

堤瓶 (7) (図1)

須恵器堤瓶。口径8・0cm、器高18・0cm、胴部最大幅13・8cmで、胴部は扁平形となる。完形品である。全体的に器壁が厚く、口縁端部は厚く丸みを帯びる。胴部側面には平行タタキが施される。胴部に貼られたラベルには、「丹羽郡池野村富士」、「第十一号・九ノ六八・古土器・大正十五年四月三十日」とある。寄贈台帳に、入鹿宮嶋古市氏からの寄贈で、同日・同内容の項目があり、この資料の可能性がある。

勾玉 (8) (図2)

乳白褐色を呈し、メノウ製と考えられる。長さ3・55cm、幅2・0cm、厚さ1・05cmで、断面は楕円形となる。片側からのみの穿孔とされる。穿孔面とは反対側の孔の周りには、薄く削られた痕跡が残る。

耳環 (9) (図2)

外径最大2・85cm、内径最大1・7cmで断面は楕円形を呈する。外面の金は部分的に残っているが、ほとんどは剥離してしまっている。

資料の時期について

杯蓋（2）は口径11・2cm、杯身（3）は口径12・8cmと小さめであり、天井部および底部の回転ヘラ削りも1/2以下となる。また、杯身口縁部の立ち上がりの形状も緩やかなことから、これらの資料は猿投窯編年（註1）のH・15号窯式、7世紀第二四半期頃に当たるものと考えられる。提瓶（7）は無把手で器壁も厚く、丁寧な調整がなされていない。提瓶はH・44号窯式期以降は消滅することが指摘されており、消滅期に当たるH・44号窯式期に相当するであろう。実年代で6世紀末から7世紀第一四半期とされる。長頸壺（4）、平瓶（5）、細頸瓶（6）はH・15号窯式期からI・101号窯式期に当たると考えられる。I・101号窯式期の実年代は7世紀中葉を中心とする。以上、須恵器の資料は、H・44号窯式期からI・101号窯式期、実年代で6世紀末から7世紀中葉頃に相当する資料となっている。

おわりに

今回紹介した所蔵資料は、残念ながら詳細な出土地点が不明で、考古資料としての価値は低いが、6世紀末から7世紀前半の入鹿池周辺の古墳を紹介する学習素材として活用する価値は十分にあるといえよう。本稿では資料を紹介することしかできなかったが、今後、学校や地域コミュニティとの連携を深め、こうした地域にある「本物」の資料を活かす場を展開していきたい。最後に、資料調査にご協力をいただいた犬山市立池野小学校、池野小学校校長・若原公代氏に感謝申し上げます。

【註】

註1…須恵器の編年は文献4に依拠した。

【文献】

- 文献1…犬山高校地歴部 1972 『地歴学報第9号』
- 文献2…犬山市教育委員会 1968 『愛知県犬山市埋蔵文化財調査報告 上野古墳群』犬山市
- 文献3…服部哲也・近藤健一 2014 『研究紀要 瀬波』創刊号 NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
- 文献4…愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史別編 窯業1 古代猿投系』愛知県

表1 池野小学校所蔵資料一覧表

番号	展示番号	種類	器種	点数	法量	備考	本稿番号
1	1	土師器	甕	1		展示札に十三塚出土とあり。	
2	2	須恵器	甕	1		展示札に十三塚出土とあり。	
3	3	須恵器	蓋	1	口径8.4cm、器高4.2cm		(1)
4	4	須恵器	杯身	1	口径11.2cm、器高5.0cm		(3)
5	4	須恵器	杯蓋	1	口径12.8cm、器高4.7cm		(2)
6	5	須恵器	平瓶	1	口径6.0cm、器高17.5cm、胴部最大幅14.9cm	貼付ラベルに「第六号 九ノ六八 古土器」とあり。展示札に入鹿出土とあり。	(5)
7	6	須恵器	提瓶	1	口径8.0cm、器高18.0cm、胴部最大幅13.8cm	貼付ラベルに「丹羽郡池野村富士」、「第十一号 九ノ六八 古土器 大正十五年四月三十日」とあり。展示札に富士出土とあり。	(7)
8	7	須恵器	細頸瓶	1	胴部最大幅15.1cm		(6)
9	8	須恵器	長頸壺	1	胴部最大幅11.7cm		(4)
10	9	瓦片	布目瓦	3			
11	10	須恵器	無台杯	1	口径13.0cm、器高3.4cm		
12	11	灰釉陶器	椀	1	口径16.5cm、底径8.3cm、器高5.1cm	「入鹿五條川棧場 宮島富重寄附」の墨書あり。	
13	12	灰釉陶器	椀	1	底径6.5cm、器高6.3cm		
14	13	灰釉陶器	椀	1			
15	14	施釉陶器	壺	1			
16	15	施釉陶器	壺	1			
17	16	山茶碗	椀	1	口径15.0cm、底径6.7cm、器高6.1cm	貼付ラベルに「第十二号 九ノ六八 古土器 昭和七年四月十三日」、「今井焼」とあり。展示札に今井出土とあり。	
18	17?	山茶碗	椀	1	口径17.0cm、底径8.3cm、器高5.6cm	「17山茶碗 室町時代初期 八曾山出土」の展示札が隣接して置いてあったがそれに相当するかは不明。	
19	17?	山茶碗	椀	1	口径14.9cm、底径6.9cm、器高5.6cm	貼付ラベルに「今井焼」とあり。「17山茶碗 室町時代初期 八曾山出土」が展示札が隣接して置いてあったがそれに相当するかは不明。	
20	18	施釉陶器	托	1	口径7.0cm		
21	19	木札	賃金木札	4	①②③：長辺12.9cm、短辺3.9cm ④：長辺8.7cm、短辺2.7cm	明治元年の入鹿切れの後、堤防再築の際に出された賃金木札。 ①②③「(表) 銀五拾匁 (裏) 入鹿御普請所」、④「(表) 銀二分」の墨書あり。	
22	20	貨幣	星風開宝	4	径2.4cm	展示札に入鹿出土とあり。	
23	21	貨幣	永樂通宝	21	径2.5cm	展示札に入鹿出土とあり。	
24	23	石製品	勾玉	1	長さ3.55cm、幅2.0cm、厚さ1.05cm		(8)
25	24	金属製品	金環	1	外径2.85cm、内径1.7cm		(9)

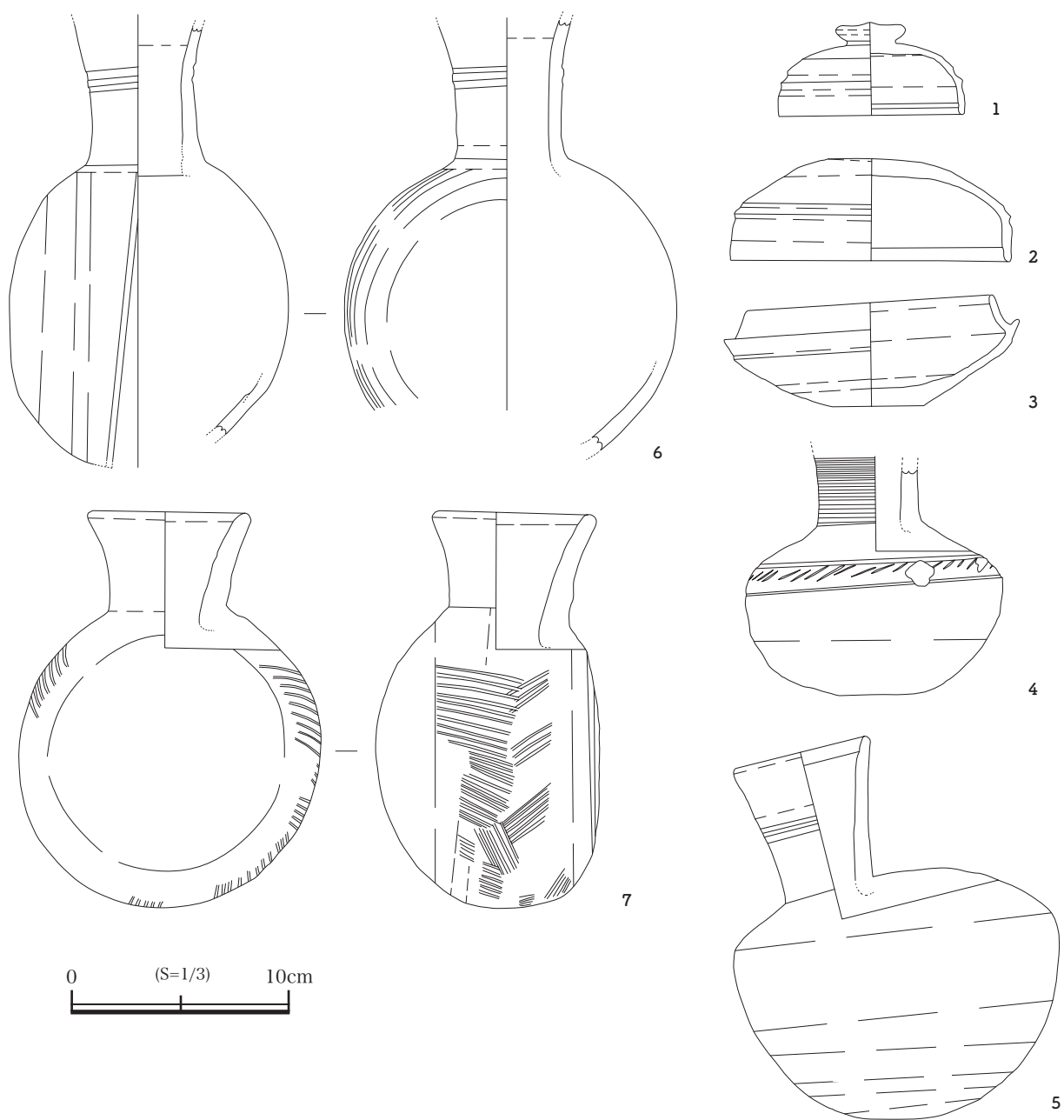


図1 池野小学校所蔵資料 須恵器 (1/3)

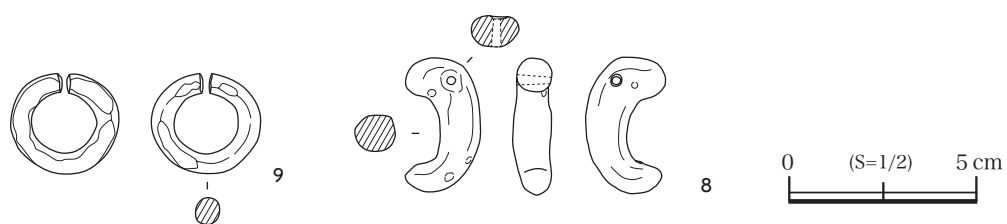


図2 池野小学校所蔵資料 耳環・勾玉 (1/2)



NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク（ニワ里ねっと）は、 設立10周年目を迎えました。

平成22年2月25日に設立されたNPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク（ニワ里ねっと）は、平成31年をもっておかげさまで設立10周年目を迎えました。「文化遺産の見えるまちづくり」を旗印に、地域の中に埋もれた文化遺産を見出し、それらをまちづくりに活かしていこうと、試行錯誤しながら取り組んでまいりました。人出不足、資金不足、地域との関わり方など、常に問題や悩みを抱えています。魅力溢れる文化遺産との出会い、そして、それに関わる活き活きとした人々の姿に出会う喜びが、活動の大きな原動力となってきました。そして10周年目を迎えた今、少しずつではありますが、地域に根付いた活動ができていますと感じています。

そして、平成31年4月からは、名古屋市の「歴史の里しだみ古墳群」でも、指定管理グループの一員として活動を展開することとなりました。新時代の始まりとともに、ニワ里ねっとも新たなスタートを切ることとなり、期待（と少しの不安）に胸を膨らませていきます。

ニワ里ねっと設立10周年をお祝い申し上げます。私は元々古墳に関心があったことが縁で加入しましたが、様々な講座や散策などの行事に参加するうち、祭礼や町家など、これまで興味のなかった文化遺産にも関心が持てるようになりました。これからも活動に参加していきたいと思っています。

（近藤 健一 様）

20数年前の古墳見学、東之宮古墳は木々に覆われ形がよく見えなくて、青塚古墳は発掘調査中で葦原の間の細道を辿ると草が繁った古墳が現れました。今、両古墳を目にする時、多くの方々のご苦労、夢や願いが思えます。

（匿名希望）

ニワ里ねっとの活動を通じて「文化遺産」というものが、より身近な、そして親しみのある存在として感じるようになりました。これが「文化遺産」が「見える」なんだなと。「文化遺産の見えるまちづくり」、いつか実現することを夢見たいと思います。（匿名希望）

10周年目に寄せて 会員の声

10周年目を迎えるニワ里ねっとに向けて、
会員の皆さまからメッセージいただきました。
ありがとうございました！

最近、「浮世離れ」という言葉を目にして、これぞニワ里ねっとに希望する私の気持ちであると思いました。その活動は浮世離れしてこそ花開くような。実利で汲々する世の流れに浮かぶ楽しみであってほしいですね。

（古川 博昭 様）

ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとでは、会員・賛助会員を募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加
しませんか？

会 費

正会員 一口 3,000 円
賛助会員 一口 3,000 円（個人・団体とも）

会員特典

1. 会員証の発行。会員証の「参加印」を集めると、記念品を贈呈。
2. 会報「さとの四季だより」を年6回お届け。
3. 各種イベントに会員料金で参加。

申込方法

- 方法1. 青塚古墳ガイダンス施設の窓口にて受付。
方法2. 下記郵便振替口座へお振込み。
通信欄に、「年会費」とご記入ください。新会員様は、「新規正会員」または、「新規賛助会員」と明記の上、住所・氏名等を必ずご記入お願いいたします。（※申し訳ありませんが、手数料はご負担願います。）

郵便振替口座

口座番号 00850-9-198552

口座名称（漢字）特定非営利活動法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

口座名称（カナ）トクビ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記の郵便振替口座にて「寄付金」も受付けております。
ニワ里ねっとの活動の応援、よろしくお願いいたします。



ニワ里ねっとが、こうして活動を続けてこられたのも、常日頃からニワ里ねっとを支えてくださっている会員の皆さま、地域の皆さま、その他多くの支援者、関係者の皆さまのお陰です。たくさんの方々にご理解をいただき、支えていただいていること、本当に嬉しく思います。これまでのご支援・ご協力に心から感謝を述べるとともに、これからも変わらぬご支援いただけますよう、お願い申し上げます。



今から10年前、僕は54歳、勤め先の犬山市役所では、その前年4月に新設された「歴史まちづくり課」の第1期生でした。僕の役職は課長補佐、課長は後に副市長になる岡田和明さんでした。

11年前、青塚古墳の管理運営は犬山市直営でした。犬山市が地元の方たちを雇用して、古墳の維持管理をしていました。正岡さんという非常に熱心な方たちの仕事で古墳の維持管理はされていました。しかし、維持管理上の色々な問題が発生して、どこかNPOに古墳の維持管理を任せることが出来ないかという議論が市役所内で起こりました。

そこで、岡田課長が白羽の矢を立てたのが、当時愛知県埋蔵文化財センターに勤めていた赤塚さんでした。NPO認証を得るための事務的な支援は、岡田課長がボーイスカウト活動の縁で親しかった犬山市市民活動支援センター（しみんてい）の川島理事長にお願いしました。

青塚古墳は、犬山市の初代文化財課長を務めた陸浦さんの時代に国の補助を得て整備されました。開設当時の苦労話は、陸浦さんから良く聞いていました。それだけに、赤塚さんが主宰するNPO古代邇波の里・文化遺産ネットワークにより、今日まで運営管理をしていただいたことには、10年前の文化財行政を担当していた僕としては、感謝の念に堪えません。

ニワ里スタッフの服部さんの落語、中野金弘さんの演劇、中野耕司さんの写真など、優秀なスタッフ皆様の活動は、心強く印象に残っています。これからも益々のニワ里の活躍を期待しています。

（長岡 昭雄 様）

より豊かなまちづくりを目指して。
これからも、ニワ里ねっとの活動に
ご支援・ご協力をお願いいたします。



NPO 法人

にわ
古代邇波の里・

文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)

〒 484-0084

犬山市大字犬山字南古券 272

TEL:0568-90-3744

FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園

〒 484-0945

犬山市字青塚 22-3

TEL:0568-68-2272

HP 《ニワ里ねっと》

<http://niwasato.net/home>

《木之下城伝承館・堀部邸》

<http://horibetei.com>

研究紀要 第6号

niwa

邇波



《編集・発行》

NPO 法人

古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

令和元年5月18日



表紙・裏表紙写真 / 中野 耕司